

寅彦の見た風景 7

野村 学

【大川筋から種崎】

「午前八時頃家ヲ出デ小舟ニ掉シテ大川筋ヲ下リ横堀菜園場松ガ端常盤丁ヨリ棒堤ヲ迂リ孕門ヲ過ギ午前十一時頃種崎ニ至リ下村ニ至リ漸次休息之後海浜ニ至ル」

(明治 26 年 8 月 3 日の日記 ※1)

はじめに

松本清張の『点と線』ではないが、寅彦の見た風景の一つひとつを地図に落としてゆくと、寅彦先生の高知での暮らしの足跡が線として浮かび上がってくる。今回はそのようなルートのうち寅彦先生がよく利用した江ノ口川から浦戸湾へとつづく“水上の道”を辿ってみたい。

大川筋から種崎へ

冒頭に引用した日記は明治 26 年 8 月、寅彦先生の尋常中学校時代のもので、浦戸湾口のまち・種崎へ海水浴にでかけたときの様子が記録されている。この年のほか、明治 25 年と明治 29 年の日記にも同じ 8 月に種崎でバカンスを楽しんだ様子が記されている。また随筆「海水浴」(※2)にも当時の様子が描かれているが、中学時代の寅彦先生にとって種崎での海水浴は夏の恒例行事だったのかもしれない。

日記には 8 つの地名が登場する。すなわち、大川筋-横堀-菜園場-松ガ端-常盤丁-棒堤-孕門-種崎である。ここに示されているルートこそが、今回、現地探訪をする“水上の道”である。これらの地名に沿って文学散歩に出かけよう。スタートは大川筋の寅彦邸。ここから江ノ口川を東へ下り、横堀から浦戸湾を経て、ゴールは種崎だ。

大川筋

寅彦少年が“小舟ニ掉シ”たのはどこだろうか。『寅彦と虎彦』(※3)によれば「屋敷前には、当時の特に河岸に住む武家が持ち舟で往来した例に漏れず、武家屋敷住人となった寺田家の舟着場もあった」とある。とすればこの日出発したのもこの舟着場からだろうか。旅立ちにあたって、このあたりの情景を描いた寅彦先生の次の文章を引用しよう。「(いつも寺田家に巡回してくる羅^ら宇^お屋^やの男が煙^き管^せの吸口を叩き込む際の) きゅんきゅんと叩く音が河向いの塀に反響したような気がするくらい鮮明な印象が残っている。そうして河畔に茂った「せんだん」の花がほろほろとこぼれているような夏の日盛りの場面がその背景となっているのである。」(「喫煙四十年」※4)。ここに登場する“河”はもちろん江ノ

口川。“河向いの塀”は当然、当時寅彦邸の向かいにあった刑務所の塀のことだろう。舞台は違うが、初期の小説「花物語」中の「棟の花」(※5)にも「桶をたたく音は向うの岡に反響して棟の花がほろほろこぼれる。」と同様の場面を登場させている。



写真1 寅彦邸付近の江ノ口川

夏の季節とせんだんの花の組合せは寅彦先生にとってよほど印象に残る故郷の風景だったのであろう。ほろほろと花の零れ落ちたセンダン(棟)の木も今はない。先へ進もう。

当時は寅彦邸から下流(東)へ下るとすぐ、今の小津橋のあたりで、流れは南へUの字を描き高知城の裾にむかっておおきく湾曲していた。「郷土的味覚」(※6)に描かれている「大きな榎樹」や「大きな棕の樹」はこの昔の流れにかかる高坂橋のほりにあった。またこの橋のたもとには“腕真砂”という妖怪が出現したというようなこともあったようだ。これは「城山の麓の橋の袂に、人の腕が真砂のように一面に散布していて、通行人の裾を引き止め足をつかんで歩かせない、これに会うとたいていはその場で死ぬ」という想像するだに恐ろしい妖怪である(「化物の進化」※7)。しかし大正の終わりには流路は現在のように改修され、幸か不幸かこの妖怪も絶滅したようである。

閑話休題。北岸に大川筋を見ながらいくつかの橋をくぐる。当時であれば、旧高坂橋、上ノ橋、中の橋、廿代橋及び山田橋をくぐることになるだろう。

横堀

寅彦邸から2キロメートルほど下流、山田橋をくぐってすぐ右手(南側)に「横堀」への入口が見つかる。今は新堀川とよばれるこの横堀。江ノ口川と南の堀川とをつなぐ南北約500メートルの水路である。「江戸時代に、土佐藩主山内家が、城下の商業発展のために掘った、高知市に現存している唯一の風情ある外堀」(※8)とのこと。その横堀境界の風景として、高知県歴史民俗資料館館長もされておられた宅間一之氏の『新堀雑感』(※9)に、歴史家としての目で当時の様子を再現した文章があるので引用したい。

「堀川には無数の木材が浮いている。新堀をはさんで、南北両町筋からは、木材問屋か、大鋸挽の人たちであろうか、朝も早くから威勢のよい会話が聞こえてくる。菜園場から北

にのびる横堀、幅は10間ほどであろうか。この横堀から西へ紺屋町の東の端、魚の棚通りまでおよそ2町、新堀は深く入り込んでいる。（後略）」

寅彦少年の頃もこのような町の雰囲気だったのだろうか。ただしこの横堀、現在そのほとんどが暗渠と化して、水面が見られるのは南側のほんの一部だけである。最近の調査により、その辺りの護岸の石積み^{みなも}の最も古い部分は幕末から明治のものと判明したそうだ（※10）。だとすれば、この石垣護岸を寅彦少年も見ていた可能性は大きいといえるだろう。報告書は「新堀川界限は、幕末の志士たちも見ていた景観を現在に伝えてくれる重要な場所といえます。」と締めくくられているが、我々寅彦ファンにとっても“寅彦の見た風景”を今に伝えてくれる貴重な場所といえるだろう。



写真2 横堀の風景

さて横堀は木屋橋から電車通りの下を南へくぐり、やがて高知市文化プラザ「かるぼーと」の前に出る。この辺りが南北に通じる横堀と東西に流れる堀川の合流点である。以前は、横堀は更に南進し鏡川まで、また東西の堀川は西に向けては文字通り堀詰（現高知市本町）まで続いていたようだ。現在は、東へ向けて浦戸湾へと続くルートのみが残されている。寅彦少年もこの東向きルートを通ったことだろう。我々も後を追いかけてよう。



写真3 横堀と堀川の合流点（現かるぼーと付近）

菜園場-松ガ端-常盤丁-棒堤

「かるぼーと」前から東へ向けて北岸沿いに菜園場、松ガ端、常盤丁とつづく。菜園場は西と南を横堀、堀川それぞれに画された町で、現在でも高知市菜園場町として地名が残る。まちの中心では菜園場商店街も賑わっている。あいだに農人町を挟んだ東側の常盤町は天保元年（1830年）に成立した商人町（※11）。現在の南宝永町あたりである。松ガ端はこの常盤町の東端にあった。歩いてこのあたりまで来ると、風向きによっては潮の匂いを感じられるようになる。

松ガ端跡について、この場所の歴史を解説した看板が現地に設置されている。それによると「(略)松ヶ鼻は、堀川沿いに植えられていた松並木の突端に位置していたので、この地名がつけました。また、堀川・鏡川・潮水(浦戸湾)の水が交わることから、三ツ頭とも呼ばれました。(略)明治期以降は水上警察署も置かれました。また、浦戸湾内を走る巡航船も付近で発着し、松ヶ鼻は高知の海の表玄関として賑わいました。」とある。寅彦先生当時はどんな様子だったのだろうか。随筆から引用してみよう。

「韋駄天を叱する勢いよく松が端に駆け付くれば旅立つ人見送る人人足船頭のものゝしる声々。車の音。端艇涯きしをはなるれば水棹みさおのしづく屋根板にはらはらと音する。」(「東上記」※12)

当時のにぎわいが聞こえてきそうな文章である。

そのほか、当時の日記にも「四時頃隊伍ヲ調へテ校ヲ出テ松ガ端ニ至リ七八艘ノ大ヒラダ船ヲ連ネテ孕門ニ至リ汽船江州丸ニ投ズ。」(明治29年6月3日の日記)や、「やがて吾等が乗りし車は(略)汽船会社ノ前ニ止まりぬ。切符買はれ端艇雇はれ、松が端も後に見て船は孕に向ひぬ。」(明治29年8月28日の日記)など、この松ガ端から舳に乗って湾内に停泊する汽船に乗り換えた様子が記されている。看板にあるように、確かにここは高知の海の表玄関だったようだ。現在は、レジャーボートや遊覧船の棧橋となっている。

松ガ端(南宝永町あたり)まで来ると対岸(南側)に棒堤の付け根がみえてくる。棒堤はその名のとおり“棒状”の“堤”で、堀川と鏡川を境するように東西に細長く伸びた地形である。先程引用した「東上記」にも「水害の名残棒堤にしるく砂利に埋もゝ蘆もあわれなり。」として当時の様子が記されている。

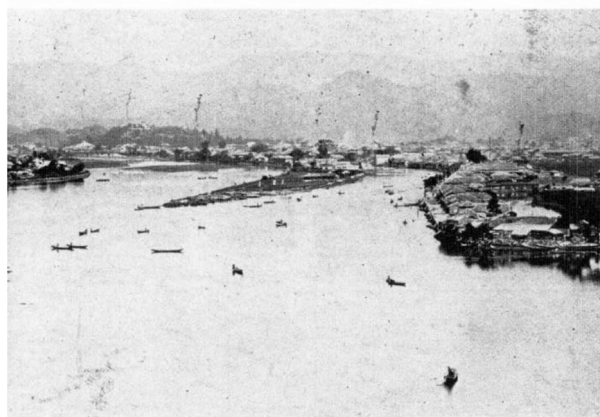


写真4 堀川と棒堤の風景(明治45年)

棒堤を回ると、そこはもう浦戸湾。そして孕門が待ち構えている。

孕門

浦戸湾を南に向かうと、正面に東西から山の峰が迫る海峡が見える。孕門である。この海峡孕門のおかげで浦戸湾は真ん中のくびれた瓢箪のような形に見える。もっとも現在は埋め立てが進み“欠けた瓢箪形”ではあるが。

孕門で真っ先に思い出されるのは“孕のジャン”であろう。二十数年前、高知大学の地質学生であった私は、この“孕のジャン”読みたさに岩波文庫版『寺田寅彦随筆集 第二巻』を手に取ったことであった。

「その怪異の第一は、自分の郷里高知附近で知られている「孕のジャン」と称するものである。孕は地名で、高知の海岸に並行する山脈が浦戸湾に中断されたその両側の突端の地とその海峡とを込めた名前である。」（「怪異考」※13）

“ジャンと鳴り響きて海上を過ぎゆく”というこの怪現象。寅彦少年も近所の老人からよく聞かされたようであるが、随筆の中で寅彦先生はこの原因を地すべりによるものではないかと推定している。また周期的に繰り返す南海地震との関連も示唆している。さらに随筆だけでなく、この孕を含む高知南岸の地形の成り立ちを論じた科学論文も発表している。友の会前会長の鈴木堯士名誉教授（高知大学）は、寅彦博士のこの科学論文「土佐国南海岸の地形に就いて」から始まる一連の論文の中で、寅彦先生は現代のプレートテクトニクス理論をすでに予測していたのではないかと推測されておられる（※14）。

「船を雇ふて浦戸湾内の磯の侵食の模様を見てあるいた」（大正15年7月31日の日記）。少年時代からよく見知った風景を、一方では随筆であらわし、もう一方では科学の研究対象とする。孕門を含む浦戸湾は、身近な風景や現象を興味の対象とする寅彦先生の特徴をよく体現している場所と言えるのではないだろうか。

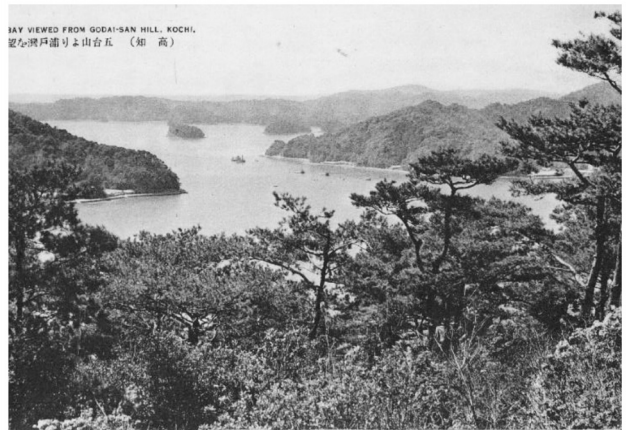


写真5 寅彦博士も研究対象とした孕門

“孕のジャン”に思いを馳せながら孕門を過ぎると、“土佐の鎌倉”と呼ばれた内海の景色を見たあと、種崎の浜に着く。

※思えば1980年代に鈴木先生を始めとする高知大学地質学教室の先生方が、世界で初めて、陸上で見られる露頭の詳細な調査と緻密な年代測定からプレートテクトニクス理論を

実証し、地質学の世界に高知の名を轟かせた。極めて個人的なことで恐縮であるが、その余韻も冷めやらぬ雰囲気の中で、鈴木先生に岩石学や高知の地質について実地にご教授いただけたことは幸せなことであった。ここにあらためてご冥福をお祈り申し上げたい。

種崎

とうとう種崎に着いた。長い道のりであった。種崎でのようすは随筆「海水浴」や「涼味数題」(※15)にも描かれているが、ここでは日記から寅彦少年の夏の日のパカンスを覗いてみよう。

明治 25 年 8 月 7 日 (日)

- 早朝床ヲ出デ、旅装ヲ備ヘ八時頃乗車シテ種崎ニ向フ
- 時ニ午前十一時半 宿ニ至リ荷物ヲ置キ海岸ニ至リ海水ニ浴シ帰リテ飯ヲ食ス


明治 25 年 8 月 8 日 (月)

- 早朝海水ニ浴シ帰リテ舟ヲ貸リ余等ガ宿所竹崎ノ比隣ノ老人ヲ雇イ「ハラカタ」釣リニ出掛ケタリ

明治 25 年 8 月 9 日 (火)

- 海水ニ浴スル三度 夕方舟ヲ港内ニ浮ブ 少時ニシテ玉兎東天ニ上リ、金波洋々沸クガ如シ。

明治 25 年 8 月 10 日 (水)

- 四時半頃、鳴リヒ ク警枕時計ノ鈴声ニ夢ヲ破ラレ、海浜ニ至リ海水ニ浴ス

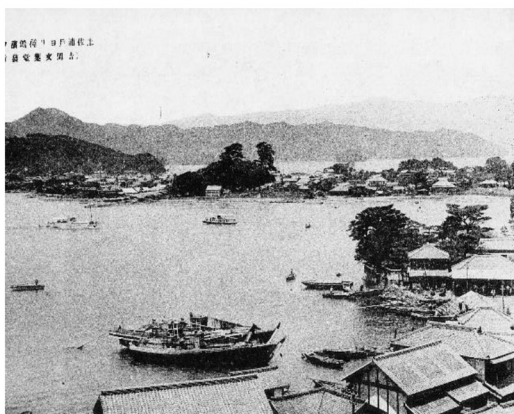


写真 6 種崎の浜 遠景



写真 7 夏の種崎浜

海水浴三昧である。

そして、高知時代、最後の種崎行。

明治 29 年 8 月 3 日（月）

○此日より父上と共に種崎ニ赴く 黒岩君も浦戸に止宿したり。西森溝淵川田の諸君も訪ひ来る事ありて夢の様な一週を暮しつ

一週間後。

明治 29 年 8 月 9 日（日）

○やがて舟は稲荷新地の前を過ぎ横堀を経て大川筋に出て漸く家ニ帰りしは午后四時頃なりけん。家の者吾が色の黒くなりたるに驚きあいぬる可笑しとも可笑しきや

高等学校入学をひかえて、ということは、つまり郷里高知を離れる日を目前にひかえて、未来に対する高揚と不安がないまぜになった、まさに“夢のような一週間”だったことだろう。そして明治 29 年 8 月 28 日。「先つ頃楽しき数日を費せし種崎の浜辺いつしか後になり行きて…（略）」。寅彦少年は熊本に旅立つ。

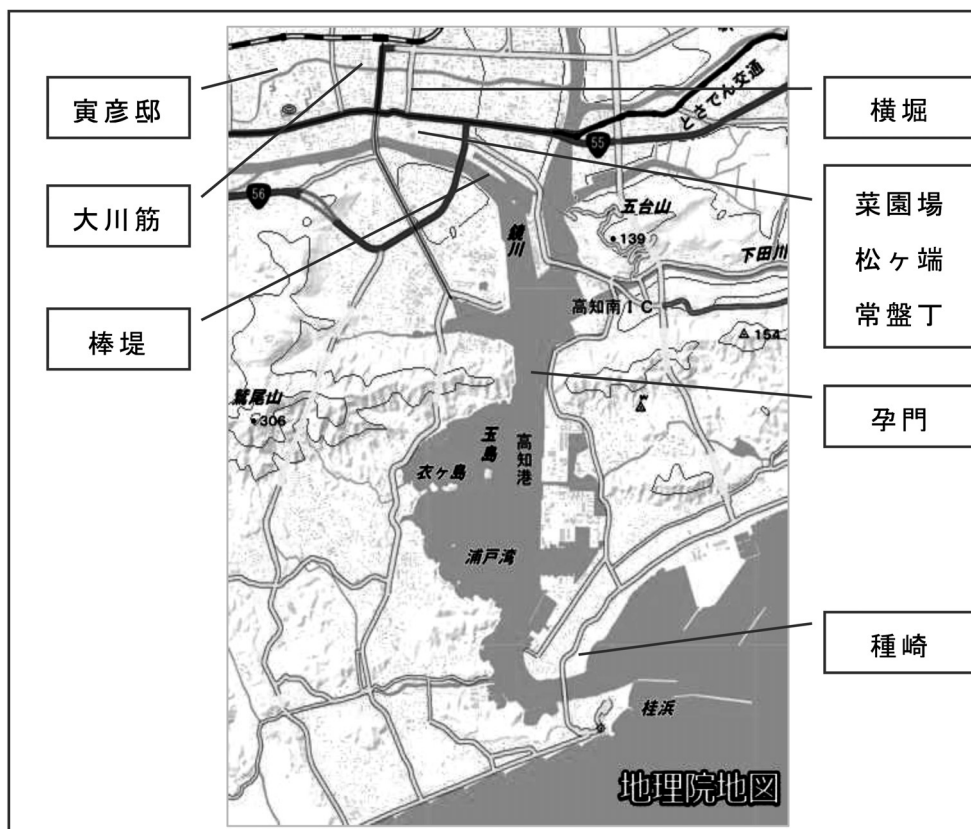
おわりに

「寺田寅彦は土佐の風土が生んだ地球物理学者であった」とは寅彦研究の先達・山田一郎氏の言葉であるが（※16）、今回その一端を紹介した高知での少年時代の体験が、寺田物理学とよばれる独自の物理学的感性を育むことに少なからず影響したことは間違いないだろう。そういう意味で、今回紹介した水上の道は、寅彦先生のその体験を日記とともに追体験できる貴重なルートではないだろうか。そして、そこから見える風景こそは少年時代の無条件の楽しさや青年時代の未来への希望または人生の大きな悲しみとともに、寅彦先生が見つめてきた生涯忘れられない風景の一つひとつだったにちがいない。そこから多くの随筆や論文が生まれたことを考えるとき、一寅彦ファンとして、このような風景を、その風景を形作る音や匂いや光とともに、寅彦先生をより深く理解するための“野外文学館”として残してゆきたいものだと強く思う。

〈引用・参考文献〉

- ※1 本文中の日記は『寺田寅彦全集 第十八巻・第二十二巻』（寺田寅彦・岩波書店・1998年）から引用
- ※2 「海水浴」（『寺田寅彦全集 第一巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996年）
- ※3 『寅彦と虎彦』（榊原忠彦・高知新聞企業・H11年）

- ※4「喫煙四十年」（『寺田寅彦全集 第四巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997年）
- ※5「花物語」（『寺田寅彦全集 第一巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996年）
- ※6「郷土的味覚」（『寺田寅彦全集 第一巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996年）
- ※7「化物の進化」（『寺田寅彦全集 第二巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997年）
- ※8「おとなの勇氣」（宇佐木びよっ吉）（『新堀川』・溝渕榮子編集・㈱高知新聞総合印刷・H22年 所収）
- ※9「新堀雑感」（宅間一之）（『新堀川』・溝渕榮子編集・㈱高知新聞総合印刷・H22年 所収）
- ※10『令和元年度 都市計画道路はりまや町一宮線に伴う埋蔵文化財発掘調査 新堀川護岸 記者発表及び現地説明会資料』（（公財）高知県文化財団埋蔵文化財センター・令和元年11月1日及び11月3日）
- ※11『高知県の地名』（下中邦彦編集・株式会社平凡社・1983年）
- ※12「東上記」（『寺田寅彦全集 第一巻』・寺田寅彦・岩波書店・1996年）
- ※13「怪異考」（『寺田寅彦全集 第二巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997年）
- ※14『寺田寅彦の地球観-忘れてはならない科学者-』（鈴木堯士・高知新聞社・H15年）
- ※15「涼味数題」（『寺田寅彦全集 第三巻』・寺田寅彦・岩波書店・1997年）
- ※16『寺田寅彦の風土』（山田一郎・高知市民図書館・2001年）
- ※17 絵葉書（写真3から写真7）は筆者所有のもの



〈文学散歩地図〉大川筋から種崎まで